

誘惑コンプレックス

プロローグ　ありえない失態

それはある金曜日のこと――呑んだことのない種類のお酒で深酔いし寝てしまった私は、とんでもない夢を見ていた。

誰にも見せたことのなかった生まれたままの姿を、男の人の前に晒さらしているのだ。

「あ……っ……んんっ……」

ゴツゴツした大きな手に直じかに胸を揉もみしだかれ、自分のものとは思えないほどのいやらしい声をこぼす。

指が食い込むたびに、胸が見たことのないような形に変わっていく。

「こんな胸をしていたのか。想像よりもずっと可愛くて、綺麗だ」

「あっ……しや、社長……」

その男の人は、なんとうちの会社の社長である君島きみじま晃あきらさん。

そう、私は社長とホテルでエッチするという、ありえない夢を見ていた。

胸の感触を楽しんでいた社長は、胸を持ち上げるように根元つかから掴み、強調された先端をチロリと舐なめた。

「ひゃうっ……！」

それから舌先で乳輪をくるくるなぞられると、先端がプクリと起ち上がる。次いでまた硬くなった先端を舐められ、身体が大きく跳ね上がった。

「や……っ……ン」

社長は見せつけるように舌を動かして、胸の先端をちろちろと舐め続ける。

くすぐたくて、でも気持ちよくて……触れられてもないお腹の奥が熱く疼いてしまう。

短く整えられたサラサラの黒髪、凛々しい眉、指紋一つついてないピカピカの眼鏡の奥には切れ長の目、シュッと通った高い鼻、形のいい唇——思わず見惚れてしまうほど綺麗な顔立ちだ。そんな彼に胸や足の間にある恥ずかしい場所を舐められると、羞恥心が燃え上がる。

「これは嫌か？」

「い、嫌……じゃないです。でも……んっ……く、くすぐたくて……あんっ……」

ああ、なんて夢見ちゃってるの……！

こんなの失礼すぎる！ 早く目覚めなきゃ！

……とは思わなかった。それどころか気持ちよすぎて、目覚めたくない！ なんて思っていた。

「あっ……んっ……しゃ、社長……っ……んっ……あっ……あん……！」

初めて味わう快感に、とろけてしまいそうだった。

「……っ……い、痛……っ」

そして身体の中に初めて男性を受け入れる痛み……下半身が引き裂かれてしまっうんじやないかと

思うぐらいの痛みだ。

——それは、ひどくリアルな感覚だったのに、私は夢だと疑わなかった。

だって社長とこんなことになるなんて、夢でしかありえないから……

けれど翌目を覚ました私は、青空もビックリするほどに真っ青になっていた。

「嘘……」

嘘でしょ!? 誰か、嘘って言って！

なぜなら私が寝ていたのはホテルのベッドで、隣に社長が眠っていたからだ。

仮面一 仮面が壊れた日

私は仮面を被って生きている。

今までも、そしてこれからも——この仮面を外すことは永遠にない。

ないったら、ないっ！ ……うん、ないっ！

『あーあ、可愛くなりたいな。杉村さんくらい可愛かったら、人生変わるんだろうなあー』

その台詞を私は今まで何度聞いただろう。

私、杉村莉々花は今から二十六年前に、ごく普通の家庭の一人娘として生まれた。特に秀でた才

能や特技もないし、成績や運動神経はよくも悪くもない。いつも平均にいるような普通の人間だ。ただ普通じゃなかったのは、容姿である……。自分で言うなって突っ込まれてしまうかもしれないけれど。

生まれてくる際になぜか遺伝子が張り切ってしまったらしくて、両親やご先祖様から選りすぐりのパーツを集め、絶妙に配置した結果——誰もが羨むような容姿になったのだ。

目はぱっちり二重だし、まつげエクステをしているとよく間違われるので、まつ毛も多いらしい。鼻は高すぎず、低すぎず、整った形だと両親は言っていた。どうやら母方の祖母似のようだ。唇はふくらみすぎて少し厚め。辛いものを食べすぎて腫れた唇みたいで自分ではあまり好きじゃないけれど、人からは芸能人の誰々さんみたいな唇だね、と言われる。これは父親似の唇だ。父はもつと薄い唇がよかったと、私と同様に自分の唇を好いてはいないらしい。

肌の色は白いほうだ。父方の遺伝で長時間日に当たっても、赤くなつて痛くなるだけで少しも黒くならない。肩まで伸びた髪は、よく染めていると誤解される薄茶色。しかも、パーマに間違われるような癖がある。

身長は百六十センチ、母が太りにくい体質なのが遺伝したようで、私もいくら暴飲暴食をしても太らない、というよりも、太る前に胃を壊すので四十五キロ前後をキープしている。

ここまで言うとき意識過剰のときでもないナルシストに聞こえるかもしれないけれど、誰もが知っている有名なところから、聞いたことのないところまで、様々な芸能事務所からスカウトされたことがある……と言えば、証拠になるだろうか。

今まで出会った人の多くは、私が自分の容姿にさぞ満足していると思っているだろう。いや、実際に言われてきたので思っているはずだ。

だけど力強く言いたい。誤解です！ 謙遜でもなんでもなくて、本当に誤解なのだ。

私はむしろ自分の容姿が大嫌いで、できることなら中身と同じく平々凡々に生まれてきたかったと心から思っている。

なぜならこの容姿のせいで、物心付いた頃から悲惨な目にしかあつたことがないからだ。

まず初めにある記憶は、母が父方の親戚から嫌味を言われているところだ。

あまりに整いすぎて、父と顔立ちが似ていない。父の子じゃないのでは？ と、父がいなくてころでしつこく尋ねられ、うんざりしていた。

パーツの一つ一つを見ていけば父方、母方、両方に似ていることがわかる。だけど、ただ母をいびることでストレス解消がしたかったのか、親戚で集まるたびそんな嫌味を言われていたのを知っている。

親戚間で波風を立てたくないと思つた母は、自分だけ我慢していれば事を荒立てずに済むからと、そのことを父に黙っていた。だけど、実は近くでそれを聞いていた私が不安になって、『私はお父さんの子供じゃないの？』と大泣きしながら父に直接聞いたことでバレてしまったのだ。

ブチ切れた父は、『俺の娘に決まってるだろうが！ 信じられないなら証明でもなんでもしてやる！』と、DNA鑑定までして親戚を黙らせたのだった。

父と母はその一件を乗り越えたおかげで、元々よかった夫婦仲をさらによくしたようだった。け

れど私は、親戚に言われた醜^{みにく}い言葉が耳にこびりついて、なんとなく自分の顔を鏡で見るのが嫌になり始めた。

しかもDNA鑑定の費用で家計が圧迫されたせいで、しばらくの間おかずはとても質素なものだった。

次に記憶しているのは、小学校に上がったばかりの頃だろうか。今思うとゾツとする出来事があった。友達と遊んでいて、ほんの少しだけ一人になるタイミングがあった時、それを見計らったように中年の男性にいきなり担^かぎ上げられて、連れ去られそうになったのだ。

幼すぎてその意味をわかっていなかった私は恐怖を感じるよりも驚いて、『おじさん、誰!』と、大きな声で騒いだ。運よく近くに大人たちがいたので、気付いてもらえた。

大人たちが慌てて駆けつけると男性は私を乱暴に下ろし、そのままどこかへ逃走したらしい。警察にも通報したけれど、未だに犯人は捕まっていない。

そのこともあり、私は両親の付き添いナシでは遊びに行くことを禁止され、小学校の登下校も両親のどちらかの車に乗ってすることになった。

大人になった今は、働きながら毎日私の登下校の送迎をするなんて大変だっただろうな、本当に有難い……と好意的に考えられるけれど、当時の私はそれが嫌でたまらなかった。みんなは友達同士で帰っているのに、自分だけが両親の車で帰るなんて寂しかったし、お前だけ車で通学なんて狡^{ずる}いと毎日言われて辛かった。

それから小学三年生の夏、私には初めて好きな人ができた。

『そのペンケース可愛いね』

『ありがとう！ お気に入りなんだ』

『どこで買ったの？ 妹が好きそうだから、今度の誕生日に同じの買ってあげたいんだけど……』

『えっとね……』

席替えで隣になった男子、大木^{おおき}くんと自然と仲よくなり、気が付くと好意を持つようになっていた。けれどその男子は、クラスのリーダー的な存在である女子、奈々^{なな}子ちゃんの意中の人だったらしくて、彼と話すたびに文句を言われるようになった。

『ちよつと莉莉花ちゃん、大木くんと話さないでよ』

初めはこの程度だった。

『どうしてそんなこと言うの？』

『とにかく話さないでったら、話さないでっ！ 少しぐらい可愛いからっていい気にならないでよねっ！ わかった!? 奈々子の言うことは絶対なんだからっ!』

話さないでと言われても隣の席だし、授業で必要な時もある。それに好きな人とはキツカケを見つけて、たくさん話したいものだ。

顔のことでいい気になったことなんて一度もない。それにどうして奈々子ちゃんに言われた通りにしなければいけないのだろうという反抗心もあり、私は彼女の文句を気にしないようにして、普通のクラスメイトと同様に大木くんと会話し続けていたのだけ……

自分の言う通りにしなかったことに腹を立てた奈々子ちゃんは、クラス中の女子たちにあらぬ噂

を流し始めた。

『莉々花ちゃんね、みいちゃんのことすごいブスって言ってたよ』

『えー、なにそれ……』

『酷いよね。ちよつと可愛いからつていい気になってさー……』

言ってもいない悪口を言ったことにされて、私はあつという間にクラスで孤立してしまった。どんなに弁明しても信じてもらえなくて、親しかった友達や大木くんも嫌われ者の私を避けるようになった。

しかも奈々子ちゃんとは中学三年生まで同じクラスだったため、中学校でも暗黒の三年間を送るはめに……

奈々子ちゃんの流す噂は年齢を重ねるたびにグレードアップしていった。最初は『みいちゃんのこと、すごいブスだつて言つてたよ』なんて可愛いレベルだったのに、中学校三年生の時には『莉々花ちゃんつてすごい男好きで、彼氏をとつかえひつかえしてるらしいよ。性病にもかかったことあるんだつて！』やら『莉々花ちゃんつて、整形してるらしいよ。整形代稼ぐために身体売ってるらしいよ』などといったとんでもなくハイレベルなものに変わつていった。

私の持ち物を見て『そういう可愛いを持つのは、男受け狙ってるからでしょ？ モテるために必死！』などと通りがかりに小さな声で言われる日々。ある時は体育の時間に着替えていると『莉々花ちゃんの下着つてなんかエロくない？ 帰りに男と会うからなんでしょ？』と大きな声で言われて、その場にいた女子全員にジロジロ見られたり……

奈々子ちゃんは目立つグループにいたから、そのグループからはもちろん嫌われ、噂を信じた大人しいグループの女子からも嫌われた……というより、不良扱いされて恐れられていた。

奈々子ちゃんが流した、くだらない噂を信じた男子数名から陰で『いくら出せばやらせてくれるの？』と尋ねられたこともある。ちなみにその中に、当時私が密かに憧れていた先輩もいて、もちろん光の速さで幻滅した。

中学生になつてからは、もう小さな子供じゃないんだから大丈夫だと両親の送迎を断つて一人で登下校していた。だけど、いきなり知らない男性から『可愛いね』と話しかけられて、それ以降つけ回されるようになってしまい、また車での送迎に逆戻りだ。こうして自分の顔がどんどん嫌になつて、とうとう大嫌いになつた。

太れば少しは見た目が変わるかも!? と思い立ち、一時期は逆ダイエットに励んだこともある。夜中に高カロリーなものを食べれば太る、食べた後にすぐ寝ると太る、などと聞いたことがあるので、目覚ましをかけて深夜に起きて、お菓子や夕方こっそり買つておいたコンビニ弁当をガツガツ食べてすぐ寝る生活を三日ほど続けたところで胃を壊した。それで一週間も学校を休むはめになったのだつた。

どうしてこうも不運なのだろう。母のお腹の中で、この顔立ちや体質を形成した時、胎児にして一生分の幸運を使い果たしたに違いない。

一人に与えられた幸運が百あるとして、みんなは長い人生でその幸運を万遍なく使っていくところを、私はいつべんに……という仮説まで立ててしまう。いや、もしそうだったとしても、考え

たつてどうにもならない。

今後の人生をどう快適に生きていくか、考えなければ……

小中学校の同級生から離れたくて、私は知っている人が一人もないであろう遠くの高校への進学を決めた。自分の学力よりも少し上の学校だったから死に物狂いで勉強し、見事合格。

暗黒の学生時代はもう終わり！ 高校生になったら友達を作つて、高校ライフを充実させるんだ！……とはいえ、この顔のせいでまた嫌なことが起きるかもしれない。

やだなー、怖いなー……つて怯えてるだけじゃなくて、予防策を取らなければ！

中学を卒業してからの春休み期間は、なにかいい方法はないかとそればかり考えていた。でも全然思い浮かばない。少しだけ気分転換しようとテレビを付けると、可愛く笑う美少女が映っていた。彼女の名前は日下部シュリちゃん。歌手、モデル、役者、様々な分野で活躍していて、歳は私と大して変わらないと記憶している。

こんなに綺麗で可愛かったら、さぞかし大変な人生を送ってるんだろうなあ……

なんとなく興味が湧いて、パソコンでその子の名前を検索した。多少彼女をけなすような意見も出てきたけれど、それ以上に出てくる、出てくる！ 絶賛の嵐！ しかも男性じゃなくて、女性からの称賛の声が圧倒的に多い。

こ、これは何事……!?

衝撃を受けた私は、シュリちゃんについて徹底的に調べることにした。

『可愛いのに、気さくでサバサバしてるよね。気取ったところがなくて親しみやすい。友達になり

たい！』

『ちよつとおっさんっぽいよね。間食はいつもスルメ食べてるんだって（笑）。あんな可愛いのに、すつごいギャップ！ でもそこがいい！』

『シュリちゃんが私の好きなアイドルと共演していても、全然嫉妬しない！ 異性に媚びる感じがまったくないし、スキャンダルとは無縁そう。可愛いのに彼氏もいらならしいよ』

『ドラマとかの衣装は可愛い系が多いけど、プライベートの服はシンプルで好感が持てる』

まとめると女っぽさを感じない、ちよつぱりオヤジな性格で、持ち物や服装や好む食べ物、可愛いものよりもシンプルで女を感じさせないもの！ 異性に媚びない！ 彼氏なんて興味がないという女の子が同性から好感を持たれるようだ。

もしやこの子を見習えば、私も女子から好いてもらえる!? というか、奈々子ちゃんの悪い意味での功績も大きかったけれど、今までの私の態度は彼女の噂を助長するぐらい、女子から反感を買ってしまうものだったのかも……!?

こ、こ、これだ——……!?

あまりに名案すぎて、頭の天辺に雷が落ちてきたみたいな衝撃が走った。

可愛いものが好きで、服装や身の回りのものをそういう系で揃えているけれど、それは家だけで使うようにしよう。背に腹は代えられない。それから、男子とも関わらないように！ 本当は高校生になったらドラマみたいな恋をしたい……なんて思っていたものの、実際ドラマに出てくるようなステキな男性なんていない気がしてきた。

だって今まで好きになった人は、私がクラスで嫌われ者になったら無視するようになったり、根も葉もない噂を信じて、いくらでやらせてくれるの？　なんて聞いてきたし、その他も変質者だったり、ストーリーカードだったり……

……とにかく二兎を追う者は一兎をも得ずって言うし！　とりあえず恋愛は後回し！　同性の友達を作って高校デビューして、明るく楽しいスクールライフをエンジョイするぞ！

おっと、前準備もせずに本番を迎えては、キャラがぶれちゃうかもしれない。

新品のノートを用意して、偽りの自分の設定を書き込んでいく。

サバサバしていて、明るくて、元気で、人懐っこくて、男の子に媚びない！　それから、それから……

興奮しているせいか力が入りすぎて、シャープペンの芯がボッキボッキに折れるものだから、途中でボールペンに替えて書き込んだ。もしかしたら受験勉強よりも頑張ったかもしれない！

次に全財産を使って下着をすべてシンブルなものに買い替えた。これで体育の時に見られてもバッチリだ。中学校の時のものをそのまま使う予定だった文房具も、可愛さとはかけ離れたデザインのものを買った。自分で決めた設定を忘れないで演じれば完璧だ。

入学式前日は一睡もできず、当日は興奮状態のままの出席となった。結果から言うと、高校デビューは大成功だった。

偽りのキャラを前面に出したところ、入学一か月ほどで少し前までの私が見たら驚いてしまうほどたくさんの友達ができた。評判はシュリちゃんと同じで、気さくでサバサバしていて親しみやす

いと上々だ。中にはこの性格でも反感を持つ人がいて、全員と仲よくなれるわけじゃないけれど、それは仕方がない。全員から反感を持たれずに仲よくなるなんて、超人でも無理だろう。

放課後の教室に残って他愛もない話をする時間、ファストフード店への寄り道、友達のいる体育祭に文化祭——毎日が楽しくて、キラキラ輝いて、一人でいる時とはまるで違って見えた。

『莉莉花ってホント面白いよね！　私、莉莉花と友達になれて嬉しいっ！　ね、今度買い物行った時さ、おソロのストラップ買おうよ！』

『う、うんっ！　買いたいっ！』

初めて特別親しいと思える友達もできた。偽りの仮面を被った私を好きだと言ってくれる友達……本当の私を見たら、どう感じるだろう。

いや、見せない。だって嫌われたくないから……

『四組の高見エリって、知ってる？　クラスで一番小っちゃくて可愛い子！　あの子さあ、すっごい男好きだよ。男子が話しかける時と女子が話しかける時じゃ、全っ然、態度違うのっ！』

『あー、それうちも思った！　てか男子に話しかける時だけ妙に上目遣いじゃない？　声とかも甘ったるくてさあ』

『やあんっ！　倉木くんのばかばかあんっ！　エリ、そんなこと思っていないもおんっ！』

『ぶっ……あはっ！　や、やばっ……似すぎなんですけどおっ！』

他愛のない話の中には、他の女子の悪口もある。ああ、過去に私もこうやって言われてたんだろ。うな。

自分と重なって胸がチクチク痛み、さすがにその会話には参加できなかった。やつぱり男子と話したり、親しくしたりすると、女子から嫌われてしまうようだ。

『莉々花はさあ、好きな子とかいないの？』

『うん、いないよ』

『じゃあさ、気になる人は？』

『いない、いない』

傍から見れば女子高生が恋バナをしている微笑ましい光景だろうけれど、私にしたら尋問にかけられているような気分だ。

『じゃあさ、うちのクラスの中なら誰が好み？』

万が一答えを間違えれば、あつという間に過去の自分に逆戻りだ。

『好みとかよくわからないし、あつ！ 漫画でなら好みのタイプは言えるよ。ツープースのルミ！あの胸には夢が詰まってるよねえ』

『あつはは！ おっさんくさいぞ！ しかもそれ女のキャラじゃん！ ていうか勿体ない。こんなに可愛いのに！ あ、そういえばユーコ、最近付き合い悪くなったと思わない？ 彼氏ができてからちよつと変わったよね』

『わかる！ 彼氏優先になったよね。気持ちはわかるけど、そういうのはちよつとね。前まではサバサバしてたのに、なんか最近女を意識しすぎてるっていうかあ』
昨日まで仲がよかった子も、男が絡めばすぐ敵となる。

こうなったら、徹底的に男子から遠ざからなきゃ……！ と、私はさらに男子から距離を置いた。自分の作り出した仮面を守るのは大変だったけれど、それ以上に一人ぼっちになるのが怖かった。また事実無根の噂を流されるのが嫌だった。

だから私は、今までもこれからも仮面を被り続けるのだ。

でも心の奥で、なにかが疼き出すこともある。

これはきつと気付いてはいけないものだ。それに気付いたら最後、二度と仮面を被れなくなるだろう。だから気付かないふりをして心の奥底に押し込め、仮面が外れないようにしっかりと固定する。

この仮面さえあれば、大丈夫――



月日は流れ、現在――私、杉村莉々花は仮面を被り続けたまま、社会人六年目の春を迎えていた。こっちにはこの色を……うーん、こっちのほうがいいかな？ でもこの色は印刷に出にくいんだよねあ……

「杉村、ちよつといいか？」

「あ、はい！」

デスクでパソコンと睨めっこしながら仕事と格闘していると、社長からお呼びがかかった。

「パルファムの件ですか？」

「ああ、B案のデザインで決定だ」

「B案ですね。わかりましたっ！」

やった〜！ 絶対B案がいいって思ってたんだよね！

高校卒業後、私はデザイン系の専門学校に二年通い、必死の就職活動の結果、卒業後は小さなデザイン事務所——「君島デザイン事務所」へ広告デザイナーとして就職することとなった。

私が入社した六年前は中心部から外れたビルの二階にオフィスを構えていたけれど、今では大きな事務所に成長。八人だったスタッフは三十名にまで増え、都心部にあるビルのワンフロアにオフィスを構えている。

会社が大きくなるにつれ、私も社会人として成長していった。

現在は大手Aパレルメーカーの株式会社パルファムが新しく立ち上げる予定のブランドのロゴデザインやポスターの制作といった大きな仕事を任されて、忙しくも充実した日々を送っている。

昔から美術の授業が好きで、他の教科に比べたら割と成績がよかった私。高校卒業後の進路をなんとかデザイン専門学校への進学に決めた。

学校ではデザインの基礎を学び、授業の一環として自治体や企業が行っているコンテストに積極的に参加するように言われていた。強制ではないので一度も応募しない人もいたし、私もあまりノリ気ではなかったけれど、せっかく入学したし一度くらいは……と出したコンテストで小さな賞をもらったのだ。小中学校時代は、よく『杉村さんって頭も普通だし、運動もできないし、取り柄は

顔だけだよね』と言われていたので、本当に衝撃だった。

コンテストの審査員は、私の顔じゃなくて、私の生み出した作品を見てくれる。顔以外の私を見てくれるんだ……！

このことがキッカケで私はデザインの世界にどっぷりとのめり込み、現在に至る。気が付いたら『いつかはするぞー！』と思っていた恋愛には目もくれず、彼氏いない歴イコール年齢を更新中なのだけど……特に焦ってはいない。

中学の時に憧れだった先輩から、いくらでやらせてくれるのと聞かれてからは、誰かに心を奪われることもなかったし……日常的に痴漢や変質者にあっていると、世の中の男なんてみんなこうなんだ！ ドラマみたいな恋なんて都市伝説みたいなものなんだ！ 変な男と恋愛するぐらいなら一人でいいや！ という気持ちになってしまう。恋愛に対して憧れはあるものの、よーしっ！ 恋愛をしよう！ 彼氏見つけるぞーっ！ という気にはなれないのが正直なところだ。

傷付くぐらいなら、もう期待なんてしない。彼氏なんていない。私はこの仕事があれば、それでいいや。

周りには恋愛経験ゼロだと知られたら奇異な目で見られるので、今まで付き合った男性が二人いる、という設定にしている。もちろん、誰かに聞かれても説明できるように、付き合った期間の年表とキャラ設定を極秘ノートに詳しく記してあるのでバッチリだ。誰かに見られたら恥ずかしさのあまり死んでしまうかもしれない。だからもし不慮の事故やなんらかの理由で私が死んだ場合、このノートは中身を見ないで燃やして下さい、と表紙に書いて、ベッドの下に隠してある。

「B案を元にC案のカラーを生かしたのも見たいそうだ」

「わかりました。じゃあ、すぐに……」

「明日までにあればいい。昼休憩、しっかりとれよ。スルメや昆布は昼飯じゃなくて、つまみだからな」

社長が自分の腕時計をツンと突く仕草を見て、とつくにお昼の時間を回っていることに気付いた。「はい、わかりましたっ！」

彼は君島晃社長、二十六歳まで大手広告代理店で営業職として経験を積み、それから独立して君島デザイン事務所を設立したすごい人だ。

入社した当時から『独立して社長になっちゃうなんてすごい！』と思っていたけれど、同じ歳になったことでさらに社長のすごさがわかるようになった。二十六歳で会社を立ち上げるなんて、しかもここまで大きい会社でできるなんて本当にすごい！

けれどすごいのはそれだけじゃなかった。サラサラでツヤツヤな清潔感のある黒髪、凛々しい眉、指紋一つついてないピカピカの眼鏡の奥には切れ長の目、シュッと通った高い鼻、形のいい唇——思わず見惚れてしまいたいようなほど綺麗な顔立ちなのだ。

顔立ちだけじゃなくて、スタイルも素晴らしい。三十歳を超えても無駄な脂肪が少しも付いていないことは、スーツ越しでもわかる。顔を見ようとすると首が痛くなるほどの身長は、噂によると百八十センチ近いらしい。

クールビューティー……というのだろうか。こんなに綺麗な男の人を見るのは初めてだ。歳を重

ねていくほど、その美しさが磨かれていっているような気がする。

無駄な話はないし、飲み会の場でも社員との間に一線を引く姿勢を崩さない。プライベートは謎に包まれていて、付き合っている人がいるのか、結婚しているのかも不明らしい。女性社員やビルに入っている別会社の社員が何人か社長に告白し、あえなく玉砕——その際に恋人や配偶者の有無を質問しても『答える義務はない』と一蹴されたそうだ。

みんな冷たいって言うけど、私はとても優しい人だと思う。

口数は多くないものの、残業が続いている社員には差し入れをして気遣ってくれるし、社員がどんどん増えていっても、社員一人一人のことをよく見てくれている。さつきもそうだ。私はいつも作業に夢中になると、昼食を抜いてスルメや昆布をかじってやり過ごそうとすることがあるのを、社長はしっかり見抜いている。

周りから気を遣われないように『ダイエットしてるので』やら『今日は朝食を食べすぎてしまっでお腹が空いてないので』などと適当に理由を付けても、社長にはそんな言い訳通用しないみたい。それに四年前、初心者でもそんな間違えはしないでしよう！と突っ込みたくなるようなミスを出かした時、先輩には散々怒られたけれど、社長は決して責めてこなかった。

そんな社長の態度に最初は、呆れられてるのかな、失望してるから怒ることさえしてくれないのかも、怒るって体力があるもんね、と悲しい気持ちになっていた。

『社長、どうして杉村さんを叱らないんですか？』

泣きそうになるのをなんとか堪えるためにトイレにいと、喫煙所から当時いた女性の先輩と社

長の話す声が聞こえてきた。トイレの前に喫煙所があるので、どちらで話す声も筒抜けなのだ。

『杉村さんが可愛いから叱らないんですか？ オヤジっぽいところがありますけど、顔は芸能人みたいに可愛いですもんね』

ああ、また顔のことを言われてる……

出るに出不らない。そして、その時は耳をふさげばいいなんて思い付かなかった。

デザインの世界では顔のことなんて関係なく生きていけると思っただけど、そういうわけにはいかないか。

自分のミスが招いた結果だ。——情けなくて我慢していた涙がこぼれそうになった時、社長は毅然として答えた。

『ああ、可愛い』

『……っ……やっぱり！』

悔しさと憎しみと落胆が混じった先輩の声、これまで何度も聞いた声だ。

先輩が社長のことを憧れや尊敬に加え、なにか特別な感情を込めて見つめているのには気付いていた。

今の様子を見るに、やっぱり先輩は社長のこと……

これでもう、先輩との関係は変わってしまう。

先輩に怒られた時、すぐくへこんだけど嬉しかった。中には自分のストレスを発散させるために怒る人もいる中、先輩の説教は私が二度と同じ失敗をして困ることのないようにという思いからく

るのだと伝わってきたから。

でも、そんなまっすぐにぶつかってくれることはもうないだろう。恋愛が絡むと、事情は変わってしまう。

『そうやって私情を挟むのはどうかと……』

『なにか勘違いをしていないか？』

『へ？』

見てないのに、表情が伝わってきたきそうなくらい呆氣にとられた声が聞こえた。

『お前も杉村も俺に付いてきてくれる大切な部下だ。可愛くないわけがないだろう。俺が杉村を叱らなかつたのは、俺が叱る必要がないと感じたからだ。俺が言わなければいけないことは、すべてお前が伝えた。あいつがもう十分反省していることに、お前は気付いてるんだろう？』

『あ、当たり前ですっ！』

『だったらこれ以上俺が言うのは、あいつを必要以上に落ち込ませるだけだ。そんなものは指導でもなんでもない。単なる自己満足だ。……だからといって、お前に嫌な役目をすべて任せてもいいという理由にはならないな。申し訳なかった』

『いえ、そんな……私……私こそ、すみません……』

呆れられていると思っただけど、そうじゃなかったんだ……

社長はクールに見えて、実はとても情に厚い。そんな人だ——

先輩はその後も変わらずに、厳しくも優しい指導を続けてくれた。後日、社長に告白するところ

をまた偶然トイレの壁越しに聞いてしまったけれど、社長の答えはNO——でも気まづくなつて辞めてしまうことなく、この事務所へ移転する前に、別の男性と結婚して寿退社していった。結婚式での先輩は、とても幸せそうだった。

懐かしいなあ……

「杉村先輩、お昼外ですかあ？ あたしこれから地下の定食屋さんに行くんですけどお、よかったら一緒に行きませんかあ？」

彼女の名前はユキちゃん、一つ年下で私の後輩だ。緩く巻いた髪が愛らしくて、春らしい花柄のワンピースがとてもよく似合う。

可愛いなあ……このワンピース、確かこの前、雑誌で載ってたの見たかも！ いいなあ、私もこういう服、着てみたいなあ……

「杉村先輩？」

「あ、ごめん。ユキちゃんが可愛いから見惚れてた。うん、行きたい！ 行こっ！」

彼女はとても人懐っこくて、こうしてよく私をお昼に誘ってくれる。まるで妹ができたみたいで、彼女と話している時の私はいつも頬の筋肉が緩みっぱなし。

私は財布だけを手に取り、ユキちゃんと一緒にエレベーターホールへ向かった。



ビルの地下一階にある定食屋さんは、リーズナブルで量も多くて美味しいので、このビルで働く人だけじゃなくて、よそのサラリーマンやOLからも人気がある。

満席で入れないかな？ と思ったけれど、運よく五分並んだだけで入ることができた。

「あたし、また見ちゃったんですよー！ 社長が告げられてるのっ！」

ユキちゃんはサバの味噌煮を味わいながら、ニヤリと笑う。

「え、また？ 今年に入ってから、えーっと……」

「五回目ですよっ！ 今度は三階の歯科衛生士でした！」

確か三階の歯医者さんといえば、受付から歯科衛生士まで美人揃いで有名だったはずだ。

さすが社長……！

正直な話、恋愛から距離を置いてる私ですら、もし社長が彼氏なら、幸せになれるだろうなあ、なんてことを考えてしまうくらい魅力的な男性なのだ。目撃された告白情報は今年だけで五回も！……だけど目撃されていらないだけで、きつともつとあるに違いない。

「んで他のみなさんと同じく振られて、その人も『誰か付き合ってる人いるんですか？』って聞いて。それで、社長は『答える義務はない』ってやつぱり答えてましたあっ！ なんか頑なにいつもそう答えるから、あたし怪しく思えてきちゃってえー」

「怪しく思えてきたって？」

「あたしも『なるほど！』って思ったんですけどお、あたしの彼氏が言うには、社長はゲイなんじゃないかって」

口に含んだわかめと豆腐のお味噌汁が、危うく気管へ入っていくところだった。

「ぶっ……ケホケホッ……！　そ、それはないでしょっ！」

「だって今まで社長に告った女の人、可愛い系から綺麗系まで色々いたじゃないですか？　でも社長は全然なびかなかったしい、ブス専なのかなあ？　って思ってたんですけど、この前告った人と、去年告ってきた何人かは不細工だったじゃないですかあ？　だからその線はないなあって思っ」

「ぶ、不細工って……」

「だってすごい不細工だったんですもん！　あたし、元々人を見る目は厳しいですけど、入社してからは毎日先輩を見てから、さらに目が肥えたんですよねえ」

ユキちゃんは、大丈夫ですか？　と、各テーブルに備え付けてある水差しから、空っぽになった私のグラスに水を注いでくれる。

グラスの水を半分ほど飲み干すと、喉が大分楽になった。

「ブス専ではないんじゃない？　私は付き合ってる人がいるか、結婚してるから断ってるんだと思うけど……」

「ええ〜？　でも、指輪してないじゃないですかあ〜」

「今としては人も多いうて聞くよ？　私は結婚してるに一票！　社長のあの落ち着いた気持ちは、一家の大黒柱っていう安定感からくるものなんじゃないかなあって思うんだけど」

「でも結婚してるなら、『結婚してるから付き合えない』って断ればいいじゃないですかあ。言わないってことは結婚してないってことで、付き合ってる人がいるって線が濃厚ですよね？」

「うん？」

そこからどうしてゲイ説に……!?

「つまりは人に言いにくいような相手と付き合ってるってことですよ？　彼氏に言われてなるほどおっと思っただけですっ！　ってことで、あたしはゲイ説を推します！」

そ、そうきたか……！

社長がゲイ……でも、社長なら綺麗な女の人を連れていても、綺麗な男の人を連れていても、どちらでも絵になるなあ……なんて思ってしまう。

「あ、杉村先輩、この話、ここまででストップしましょ」

「え？」

ユキちゃんは「お疲れ様でえす」と言っ、ニッコリ笑う。

「あら、お疲れ様」

声に反応して振り向くと、財布だけを持った目黒さんがうしろの席に座るところだった。

彼女は目黒由美子さん、黒髪のロングヘアが特徴のクールビューティーだ。目黒さんは三か月前に別のデザイン会社から転職してきた二十九歳の女性で……

「目黒さん、お疲れ様です。これからお昼ですか？」

「ええ、やる気のないあなたと違って、私は今まで作業していたものだから」

元々あまり好かれてはいなかったのだけど、株式会社パルファムの仕事を受け持つようになってからさらに嫌われるようになったのだ。

「可愛いって得ね。社長に色気で取り入って、パルファムみたいに大きな仕事が取れるんだもの。普段は女性らしくないサバサバした態度だけど、男の前ではどう態度を変えているのかしら。興味深いわね」

「なっ……」

「すみません、他の席は空いていますか？」

「あ、こちらの席にどうぞー！」

先ほどよりも空いてきたので、一人用の席ならポツポツと空いていたらしい。目黒さんは私たちから離れた席に腰を下ろす。

色気で仕事取るわけじゃないでしょお!?

頭の血管が切れそうになるのをなんとか堪え、怒鳴り出したくなるのを我慢するために豚の生姜焼きとご飯を頬張り、むしゃむしゃと咀嚼する。

「あんの、腹黒っ！ ホンット嫌なヤツですよねえ！」

「ユキちゃん、『腹黒』じゃなくて、『目黒』さんだから」

「んなことあ知ってますよお！ あだ名ですっ！ あだ名っ！ なーにがやる気のないあなたと違って……だっ！ 仕事中にネットショッピングしてくせにっ！ どっちがやる気ないんだっつーのっ！」

そう、目黒さんは自分はやる気がある！ と主張するのに、行動が伴っていない人なのだ。

就業中にネットショッピングはもちろんのこと、SNSで呟いたり、ブログの更新までもしてい

る始末……気付いた周りが注意しても、参考になりそうなデザインを調べているだけだ、勝手に遊んでいるなんて思われるのは不快だと逆切れするらしい。

アピールが上手いから周りではやる気がある人だと思っている人もいるけれど、一部の人間は声が大きいただけと気付いている。私とユキちゃんも気付いている側の人間……

「あいつ、杉村先輩がどれだけ頑張ってるか知らないくせにっ！ あー腹立つっ！ あたし、腹立つとお腹空くんですよねえ！ ご飯おかわりしちゃうおっかなあ」

うう、ユキちゃん……

なんていい後輩を持ったんだろうと、涙が出そうになる。

腹黒さん……いや、目黒さんは前の会社で九年デザイナーとしての経験を積んだベテランらしい。今まで言われてきた嫌味から察するに、自分よりも職歴が浅い私が大口の仕事を任せられ、私が今まで引き受けていた仕事の後任をさせられることに納得していないようだ。

そもそもパルファムの仕事は目黒さんが入社する前に話が来ていた。その時いた社の全員でパルファムの新ブランドにふさわしいデザイン案を提出し、まずは社長とアートディレクターの横田さんの二人でそのデザイン案の中からいいもの三つまでを選び、最終的にはパルファムにどのデザインがいいか決めてもらった。

新人もベテランも関係ないコンペで選ばれたのだと説明しても、目黒さんは『どうせ色目を使って勝ち取った仕事でしょ？』と言って、なにかと突っかかってくる。

パルファムの話を聞いた四か月前の私は、新ブランドのデザイン！ 絶対楽しいし、選ばれた

い！と意気込んでいた。

コンペのために与えられた製作期間は二週間。長いようだけど通常業務の合間を縫^ぬって作業をしなければいけないので、そんなに時間はない。

そのために残業してもいいと言われていたけれど、私的には不可だ。うちの事務所が独自でやるコンペだから、クライアントからの報酬^{ほうしゅう}は出ない。つまり残業をして残業代を発生させてしまえば、うちの会社の負担になるだけ。社外秘の資料もあるので自宅での作業も不可。

わずかな時間で新ブランドにふさわしいデザインを考えなければ……

自宅には持ち帰れないと言っても脳内で考えることはできるので、帰宅してからは脳内でデザインを考えて、朝は始業時間よりも二時間早く出社し、必死にやりくりして作った作業時間で帰宅してから考えたデザインをデータに起こしていく。

朝方までデザインを考え、数時間だけ寝てから出社する生活を二週間続けていたので体力の限界を感じてフラフラだった。けれど、満足できるものを仕上げることができた。

私のデザインが選ばれた時は本当に嬉しくて、その場で泣いてしまいそうになった。でも、『こんなところで泣いちゃって、ぶりっ子してるんじゃないの?』と思われるのでは!? と仮面についてるセンサーが反応して警報音を鳴らしたので、悲しいことを思い出して必死に引^ひつ込めた。

「杉村先輩、あんな腹黒口だけ女の言うこと、気にしちゃダメですよっ!」

「うん、大丈夫。ありがとう」

「ホントに気にしないで下さいねっ! あ、この後、あたしコンビ二行くので、おやつ用になにか

つまめるもの買ってきますよっ! なにかいいですか?」

「じゃあ、おつまみ昆布。あ、でも自分で払うから。若い子に払ってもらうわけにいかないし」

「若い子って、大して年、変わんないじゃないですか〜! ていうか、なんでそんなおっさんセレクトなんですかっ! お菓子じゃなくておつまみだし!」

本当は新製品のチョコとかクッキー! って言いたいところだけど、可愛いものの好きなぶりっ子……なんて思われたら困るしね。

「杉村先輩、ほんつとおくに、無理しないで下さいねっ!」

無理なんてしていない。本当に大丈夫だ。だって私は仮面をつけているから。目黒さんにいくら悪意のある言葉を投げつけられても、仮面に傷が付くだけ。仮面を否定されても、それは本当の自分じゃないから平気だ。

だから私は仮面を被^{かぶ}り続ける。

ずっと、ずっと……それが私の処世術^{しよせいじゆつ}なのだ。



「お先に失礼します」

今日は金曜日——定時に業務を終えた私は、タイムカードを押してエレベーターホールへ向かった。

珍しく定時に終わったなあ……

今日は早く帰ってゆつくり休もうかな。それともショッピングに行こうかな。会社に着ていく用の春服を見て、新しいルームウェアも見よう！

普段は『毛玉の付いた、首がダルンダルンに伸びたスウェットを着てるんだ！』なーんて言うけど、家での私は可愛いルームウェアに包まれているのだ。だって家では家族以外誰も見ないしね！

どこから回ろうか……なんてことを考えていたら……

「あら、杉村さん」

うしろから声をかけられた。この声は……振り返ると、やっぱりその人がっこり笑って立っていた。

「あ、目黒さん、お疲れ様です」

うげえ……また、嫌味を言われるのかな？

でも、おかしい。いつもなら小馬鹿にするような笑みを浮かべているのに、今日は妙に穏やかだ。機嫌がいい……とか？

「お疲れ様、これから帰るの？」

ショッピング……なんて余計な情報を与えては、それをネタになにか嫌味を言われるかもしれない。だから「はい」と短く返事をしたら、「じゃあ問題なさそうね」と言われた。

問題なさそうって、なに……!?

「実はこれから友人の付き合いで合コンに行くことになってるの。でもメンバーが急に足りなくなっちゃったのよね。杉村さん、予定がないならお願いできるかしら？ 費用はもちろん、こちらで持つわ」

し、しまった……予定があるって言えばよかった……！

「す、すみません。私、合コンとかそういうのは……」

行ったことないよ！ 誘われることはあっても、全力で避けてきたんだから！

合コンなんて第一印象がものをいう場だ。もし友達が狙ってる男性が私の容姿を気に入りでもしたら……ああ、怖い！ 想像するだけで恐ろしい！

「ああ、杉村さんみたいに可愛いと合コンなんかしなくてもより取り見取りですものね。モテない下々の者が行くような場には行きたくない、と。なるほど、そういうことなのね」

ええええええええ！？ そ、そうくる……!?

「いえ、そういうんじゃないわ」

「それとも今、彼氏いるの？」

行きたくない……っ！ 彼氏がいることにしちゃおう。

「実は……」

「どんな人？ 私が連絡して許可をもらうから、連絡先教えていただけ？」

はあ!? なんてそうなるの!?

連絡先なんてあるはずがない。彼氏いない歴イコール年齢なんだから！ それに協力してくれる

男友達なんて一人もいないし……

「じゃあ、問題ないわね」

断る術^{すべ}を失った私はにつこり笑った天敵に引つ張られ、強引に合コンへ連れて行かれることになった。



合コンは会社からほど近い居酒屋の個室で行われた。

女性メンバーは私、目黒さん、目黒さんの友人の酒井^{さかい}さん。そして男性メンバーは目黒さんと同世代の落着いたスーツの三人。公務員と食品メーカーの営業と不動産屋の事務をしているらしい。

「すっごい可愛いから、芸能人かと思っちゃったよ！ 本当に違うの？」

「違います。ハハ……お、お若いのにお世辞^{せじ}がお上手ですね……」

「いやいや、キミの方が若いしっ！ 面白いね」

見られてる、見られてる。

オヤジキャラな私の性格を知らない男性からは『もつと知りたい！』というようなギラギラした目で、そして目黒さんと酒井さんからは『視線で殺せるなら殺したい！』というような目で見られている。

目黒さんがなにを考えているのかわからない。目黒さんは、なぜ私をこの場に連れて来たの

か……

よくわからないけれど、私が取る対応は決まっている。それは仮面を強調して、幻滅^{げんめつ}してもらうこと。

「女の子たち、飲み物なににする？ はい、ドリンクメニュー」

「ありがとうございます。優しいんですね」

目黒さんはいつもよりも高い声を出して、ニコツと笑う。酒井さんと目黒さんが二人で一つのメニューを持って眺^{なが}める。私の席からは見えないけれど、頼むものはいつも決まっているので問題ない。

「私はビールで」

「お、ビール吞めるんだ？ 甘いじゃなくて大丈夫？」

「はい、大丈夫です。むしろ甘いのは好きじゃないんで」

大丈夫だけど、本当は好きじゃない。ビールなんて苦いとは思えない。甘いのが苦手なんて嘘だ。むしろ大好き！ でもお酒はとりあえず生^{なま}つてことにしていた。深読みしすぎかもしれないけれど、私が甘いジュースのようなお酒を頼むと、男受けを狙っているように思われる気がするからだ。

女性だけの場で吞む時も、男性がいる場でだけビールを吞むなんて自分を印象付けようとしてるんじゃない？ などと思われては困るので、どこでもビールだけを吞むよう徹底している。

本当はカラフルなカクテルや果物がのったパフェみたいなお酒に憧^{あこが}れてるんだけど……多分一生

味わう機会はないだろう。

目黒さんと酒井さんが頼んだお酒は、まさに私が吞んでみたいものだっただ。

うう、羨ましい。一体どんな味がするんだろう。

「じゃ、酒もきたし、とりあえず乾杯しよっか」

乾杯を済ませた私は、声のトーンを落として会話が弾まないよう心掛ける。

女性らしさを出さないように、慎重に、慎重に……

それはさておきこうして見ると、社長のレベルがどれだけ高いかがよくわかる。

社長みたいな人が合コンにきたら、女性メンバー大歓喜！ その後ドロッド口の戦争になるんだろうなあ……って、なんで私、社長のことを考えてるんだろ。

中座してトイレに着くと、ドツと疲れが出て大きなため息が漏れる。

ああ、もう戻りたくない……

このまま家に帰って休みたい。ゆっくり半身浴した後、可愛い下着を付けて、可愛いルームウェアを着て、可愛いものに囲まれながらゴロゴロしたい……

学生時代はお金もないので地味な下着を自宅と外で兼用していた。けれど、社会人になってお金に余裕ができてからは、自宅用の可愛いものと外出時用のシンプルなものを使い分けているのだ。

普段の抑圧が強すぎるのか、私の部屋は可愛いものに埋め尽くされている。自室にいる時が一番幸せな時間だ。

……と、現実逃避しても仕方がないんだけども。

覚悟を決めて戻る途中で、みんなの会話が聞こえてくる。お酒が入っているせいか、声が大きくなっているようだ。

「由美子さんと莉々花さんは同じ会社なんだよね？」

「ええ、そうなの。私の後輩よ」

デザイナーとして勤めた年数は目黒さんのほうが長いかもしれないけど、今の会社に勤めてる年数は私のほうが長いわけで……うむむ、後輩っていうのはちよつと違うような……なんてどうでもいいことにこだわってしまうあたり、私は目黒さんのことが本当に嫌いなのだ。

「莉々花ちゃんったら、いつも彼氏が欲しいってうるさくって困って……だから今日の合コンは莉々花ちゃんのために開いたのよ」

は!? なに言ってるの!? この人!

当然だけど、そんなこと一言も口にしていないし、仮にそう思ってたとしてもこの人には言うはずがない。

ていうか『莉々花ちゃん』って、なに急に馴れ馴れしい呼び方に変わってるの!? 普段は苗字でしか呼んだことないくせにっ!

「えっつ! そうなんだ? 莉々花ちゃんぐらい可愛かったら、合コンなんて開かなくても、より取り見取りじゃない?」

「それがそうでもないの。ほら、莉々花ちゃんって顔はいいけど、それだけというか……性格に問題ありなの。顔に似合わずガサツだし、会話も広げようと努力しないし、だから男の人が引いちゃ

うのよね」

「ああ、確かにあんまり会話が弾むタイプではなかったね」

ハイ、そうです。弾ませないようにしてたんです。

「恋愛だけじゃなくて仕事もそんな感じでね……。ここだけの話、社長と取り引き先に色目を使つて、本来なら私が手掛けるはずの大きな案件をあの子が横取りしちゃったのよ」

はあああああああ!!

「マジで!? それは酷いわ」

いや、違うから! 酷いのは目黒さんのほうだから! こんの腹黒っつ!

「でも、可愛いから周りにチャホヤされて育っただけで根はいい子なのよ?」

悪口ばかり言っている女だと思われないうにか、フォローも忘れない辺りがやはり腹黒い。

チャホヤなんてされてないしっ! この顔のせいで今までどんな人生送ってきたと思つてんの!? 怒りで血管がプチ切れそうになったので、何度か深呼吸を繰り返す。

ここで切れたって、私が悪者に見えるだけだ。

「でもあんだだけ可愛かったら、ちよつとぐらいワガママでも目え瞑れるわ」

「わかるわかる。彼氏欲しいなら、俺立候補しちやおうかな」

「あ、俺も」

冗談じゃないし……っ! もう、やめてよね!

私は個室から少し離れ、わざと足音を立てながらまた個室へ近付く。

「あ、戻ってきたみたい。今の話は内緒で……ね?」

目黒さんに甘えたような声でお願いされた男性陣は、「もちろんわかってるよ」とデレデレの声で返答した。

はいはいはい! 聞こえてましたからっ!

「ただいま戻りました」

なにも聞いていない素振りです。席に戻ると、全員何事もなかったかのように「お帰り」と声をかけてくれる。

「随分遅かったのね?」

「はい、少し混んだので。今は空いてきたみたいですよ。吞むとトイレが近くなりますもんねっ!」

「やだ、莉々花ちゃんったら下品なんだからあ。みんなごめんなさいねえ」

なんてね! 戻るタイミングを失ってただけですっ!

「そう、じゃあ私も行ってこようかしら」

「あ、じゃあ私も」

目黒さんと酒井さんが揃って腰を上げ、席を後にする。男性三人の中に一人取り残される状況……かなり気まずい。

「莉々花ちゃん、次はなに呑む?」

「あ、えっと、次はソフトドリンクにしようかと……あれ?」

持っていたはずのハンカチがない。うつかりトイレに置き忘れたみたいだ。
「どうしたの？」

ハンカチ持ち歩いてるって知られたら、女の子っぽいって思われるかな？
「すみません。えーっと、呑みすぎてまた尿意がつ！　ちょーっともう一回トイレに行つてきますね」

「ああ、そうなんだ。早く戻つてきてね」

「は、はい……」

うう、早く帰りたい……そんなことを考えながらトイレのドアに手をかけると、

「ね、杉村はどうだった？　いつも私が愚痴^{ぐち}ってる通り最悪でしょ？」

と、さっき男性達と話してた時とは比べ物にならないほど低い目黒さんの声が聞こえてきた。

二人でトイレに来たのは、悪口タイムのためだったようだ。

自分の間の悪さに、心底嫌気がさす。

しかもさっきまで『莉々花ちゃん』だったのに、友達の前では『さん』もなしの苗字呼び捨て……！

「ホント顔だけの女つて感じだったー。男にコビコビだったしい……」

「でしょう？」

え、あれのどこが!?　下品とか言つてませんでした!?

「まあ、今回の男は狙つてないから別にいいんだけど。今日集めてくれたメンツ、全員ヤリチンだ

し、あいつらのうちの誰かがあの女を落として付き合うまでもつていけば、あんたのこの社長も奴に幻滅^{げんめつ}するでしょ」

はあああああ!?

「そうね。そうすればパルファムの仕事からも外されるはずだわ。実力のないあの子のやつた仕事を途中からやらされるなんてプライドが許さないし、そうなったら全部最初からやり直すわ。私の方がセンスもいいし、納期は少し押しちゃうかもしれないけど、まあ先方もデザインを見せれば納得してくれるでしょうしね」

この人、嫌がらせをしたくて言ってるのかと思つたけど、本気で私が色仕掛けして、パルファムの仕事をもらったと思つてるの……!?

頭に血が上つて、思わずドアを開いてしまう。

「あのっ……!」

突然勢いよく開いたドアから、悪口を言っていた相手が登場して、二人は驚いている。目黒さんは吊り目がちな目を大きく見開いた。

オヤジっぽくてサバサバした性格の仮面を被^{かぶ}っているのだから、キヤラ的には聞き流さないといけないところなのに……ああ、ダメだ。止まらない。

「わ、私……そんなことしてません！　何度も説明しているように、あの仕事はコンペで正当に決まったことで……」

止まらなかった割には、いざ面と向かうと、言葉が喉^{のど}に詰まって上手く話せなくなる。目黒さん

は驚いているようだけど、本人に悪口を聞かれたことに対しては少しも怯^{ひる}んでいない。

「あら、なんのこと？」

「え……？」

し、しらばつくれる気……っ！

「それよりもどうしたの？ またトイレ？」

「あ、いえ、忘れ物を……」

あ、いけない。動揺しちゃって、つい本当のこと言っちゃった！

「忘れ物？ ああ、もしかしてこのハンカチ？ ちゃんと持ち歩いてえらいのね。はい、どうぞ」
受け取ろうと手を伸ばすと、そのまま床に落とされた。

「ちよっ……なにを……」

「ああ、ごめんなさい。手渡すつもりが落としちゃったわ。うふ、酔っちゃったのかしら？ 私、杉村さんと違ってお酒に弱いから」

彼女の目付きは酔っているとは思えないほどしっかりしているし、口調もハキハキしているし、顔も赤くない。すっごい腹立つ。でも、本当に酔ってる可能性もあるし……

とりあえずしやがんで拾おうとしたら、床に落ちているハンカチを踏みつけられた。

「あら、ふらついちゃって足が……ふふ、ごめんなさいね」

ハンカチには足跡がくつきり付いている。思い入れのある特別なハンカチではないけれど、その行為は私の心まで踏みつけたように思えた。

こんの、腹黒……っ！

これだけ確かな足取りで踏んだのなら、絶対に酔っていない。そう確信した私は、ハンカチを回収して立ち上がり、腕を組んで小馬鹿にしたような笑みを浮かべる目黒さんを睨^{にら}む。

「い、いい加減にして下さい……っ」

「はあ!? 酔って足元がふらついただけなのに、先輩に向かってそんな言い方はないんじゃないのっ!? あんた、礼儀つてもんを知らないわけ!?」

目黒さんが言い返す前に、酒井さんが口を出してきた。あまりの気迫で一瞬怯^{ひる}んでしまう。

「さっきの発言といい、わざとどしか思えませんか!! それに濡^ぬれ衣^{ぎぬ}を着せられることも納得いきません!!」

いつもなら完全に引くだろうけれど、お酒が入っているせいか素^すの自分が出てきてしまう。

これ以上はダメ!! 二度と会わない人ならまだしも、職場で毎日顔を合わせる人と揉^もめたら、今後^{さき}に差^さし障^{さわ}る!!

「なんのこと？」

目黒さんはクスッと笑って、悠^{ゆう}々と化粧直しを始める。

「仕事のことです!!」

「仕事のことなんて一言も話してないわよ?」

「とぼけないで下さいっ!!」

「勝手に盗み聞きして勘違いするなんて迷惑なんだけど」

そう言われると、なにも言い返せない。

確かに会話を最初から聞いていたわけじゃないし、盗み聞きと言われればそうなるだろう。

「酔っぱらってるからってなんでも許されると思わないでよね。由美子に謝んなよ」

それはこっちの台詞だと言ってやりたい。

ああ、この追い詰められ方、中学生時代をすごく思い出す。高校に入って仮面を被るようになってからは波風を立てないように生きてきたから、こういった状況は久しぶりだ。

言い返してやりたいことはたくさんあるのに、心臓がバクバク激しく音を立てて、指先が震えてしまう。

ここで本格的な喧嘩をすれば、仕事がし辛くなる。かといって悪くもないのに謝るなんて、プライドが許さない。

「ほら、謝んなよ。可愛いつてだけでなにも言わずに許してくれるのは男だけだし」

目黒さんは酔っていないようだけど、酒井さんは大分酔っているようだ。すごく顔が赤い。だからこそ攻撃的なかもしれない。

「……っ」

心臓の音が、とても近く聞こえる。左胸からじゃなくて、耳のすぐ傍から聞こえてるみたいだ。

『なにも悪いことなんてしてないのに謝りたくありません！ 謝るのはそっちの方じゃない！』

頭の中で、自分の声がグルグル回る。

でも早く謝らないと、会社でもっと気まづくなってしまう。

目黒さんには以前まで私が手掛けていた仕事の後任も引き受けてもらっているし、彼女とはなにかと話す機会が多い。気まづくなったらせいで、もし仕事に影響が出てしまったら……

「なに黙ってるの？ 由美子に早く謝んなさいよ！」

なんのために仮面を被っているの？ 仮面を傷付けられても、痛くもかゆくもないんじゃないのか？

「……すみませんでした」

「まあ、お酒の場ってことで今日のところは許してあげるわ」

勝ち誇ったように笑う目黒さんの顔を見ると、腸が煮えくり返りそうになる。

あれ、おかしいな……

仮面を傷付けられただけなのに、辛くて堪らない。これ以上この場にいたら、泣いてしまいそう。

この人たちに涙を見られるのは絶対に嫌……！

「私、酔って気持ち悪いので、途中ですみませんがこれで失礼します」

「は!? なに言ってるの？ 途中でなんて……」

酒井さんが、慌てて立ち去ろうとする私の手を掴んだ。私はそれを咄嗟に振り払った。

「すみません、すみません！ もう吐きそうなんです！ 楽しい合コンを一瞬にして悪夢の場に早

変わりさせちゃいますからっ！ 失礼します！」

それらしいことをベラベラ並べてトイレから出て、置いたままのカバンを取りに個室へ戻る。

「あ、おかえり。待ってたよー！」

「あの、すみません。私、酔って気持ちが悪くなったのでこれで失礼します……！」

おごってくれると言ったけれど、借りを作りたい。カバンから財布を取り出し、中を開くと万札しか入っていないかった。

うう、両替えなんてしてたら、目黒さんたちが帰ってきて押しとどめられちゃうかも……！

かなり辛かったけど諭吉を一枚取り出して、テーブルに置いた。

「いやいや、大分多いし！ っていうか、おごるからいいよ」

「それよりも大丈夫？ 俺が家まで送っていつてあげるよ」

「いや、俺が……」

男性陣が腰を上げようとする。酒井さんがやりチンだと言っていたことを思い出し、慌てて首を左右に振った。

「だ、大丈夫です！ 本当に大丈夫なので……し、失礼しますっ！」

すぐに居酒屋を出た私は、エレベーターを待たずに階段を一気に駆け下りた。居酒屋の入っていたビルから出た瞬間、涙がボロボロこぼれた。

バカじゃないの？ 本心で謝ったんじゃないのに。仮面を被った偽りの私が形式上謝っただけだ。それなのにどうして泣いてるの？ どうして悔しいと感じるの？

「……っ……」

仕事でトラブルになるより、素直に謝っておいた方がずっといいじゃない！ 本心じゃないんだし！

自分の中で先ほどの行為を正当化しようとしたけれど、涙はなかなか止まらなかった。



居酒屋を出た後、私は家に帰ることなく一人会社に戻ってきていた。

こんな顔で家に帰ったら、両親を心配させてしまう。私はまだ実家暮らしなのだ。正確に言う可就職してからすぐに一人暮らしを始めたものの、隣人がストーカーになって数々の恐ろしい行為を始めたので二か月で出るはめになった。

うう、嫌なことを思い出してしまった。とにかくこの泣き腫らした顔をなんとかしなければ……

「あった。よかった」

それからもう一つ、防犯ブザーを会社に忘れたことを思い出したのだ。

駅から我が家までは、少し薄暗い道を歩かなくてはならない。繁華街に近いこともあり、夜遅くに歩いていると高確率で変質者がうしろから付いてくる。だから危害を加えられそうになった時は躊躇わずにブザーを鳴らすことにしている。

なにかあってからじゃ遅い。自分の身は自分で守らなければ！

着ていたジャケットのポケットに防犯ブザーをしまって、自販機で買ってきたお茶のペットボトルを脇の上にあてる。

「冷たっ」

ハンカチに包んでからあてた方がいいかも……って、そうだ。今日持ってきたハンカチは殉職したんだって……

今日は金曜日だし、みんな早めに退社しようだ。いつもならまだ人がいる時間なのに、今日は一人も残っていない。誰もいなくて助かったけど、鍵が開いていたのは不用心だ。

業務の都合上、退社時間がまばらなため、『この時間には施錠しますよ』と言っても無理なので、一人一本事務所の鍵が支給されている。それで、最後に退社する人間は鍵をかけていくのがルールなのだ。

作業に夢中だと誰かが退社しても気付かない時があるし、誰が残ってるだろうと思って開けっ放しで帰ったのかもしれない。

お茶が温くなるまでやっていたおかげで、白目は赤いけど脇の腫れは引いてきたような気がする。でも、まだ『泣いてきました』って顔だなあ……

二十一時……まだ両親が起きてる時間だ。事務所で時間を潰させてもらって、寝静まった頃に帰ろう。

『今日も仕事で遅くなるので、先に寝て下さい』

母にメールを送ると、すぐに『わかりました』と返ってきた。よし、これで遅くなっても心配さ

せずに済む。

温くなったお茶を冷蔵庫にしまって、新たに買ってきたお茶を脇にあてていると、ドアが開く音が聞こえた。

えっ！ 鍵の閉め忘れじゃなくて、誰が残ってたの!? でも、真っ暗だったよ!

まさか目黒さん!? ……はないか。まだあの男の人達と呑んでる最中か、酒井さんと私の悪口大会をしているはずだ。

誰だろう。うちの会社の人じゃなくて、警備員って可能性もあるかな。どっちにしろ気まずいなあ……

足音と煙草の香りが近付いてくる。お茶をそおと避けて周囲を窺ったら、社長が不思議そうな顔をして立っていた。

「杉村、どうしたんだ? お前、定時に退社してなかったか?」

「しゃ、社長……お、お疲れ様です。あの、忘れ物しちゃって……」

よりによつて社長……! !

「忘れ物?」

失礼だとはわかっていても、顔を見られないように俯いてしまう。

「はい、あの……防犯ブザーを」

ポケットにしまった防犯ブザーを取り出して見せると、社長がまじまじと眺め出す。

え、なに? まさか泣いてるの……バレた! !

「それが防犯ブザーなのか？」

「え？ あ、はい」

「とても防犯ブザーに見えない形だな」

私がついている防犯ブザーは、ドーナツ型の可愛らしいものだ。

「そうなんです。昔は『防犯ブザーです！』って主張しているようなデザインが多かったんですけど、最近はこんな可愛いデザインのものも売ってるんですよ」

……しまった！ 誰にも見せないと思って、可愛いを買っちゃったんだった！ 見せてどうするの！ こんなことなら、もっとシンプルなものにしておけばよかった！

「あー……つと、えーつと、最近だと普通のデザインのを見つかるのが難しいぐらいで、私も仕方なく可愛いのを買った感じで……は、はは……」

早くしまいたいのに、まじまじと見られているせいでなかなかひっこめられない。

「そんなので、ちゃんと音が鳴るのか？」

「はい、こう見えて結構大きな音が出るので、痴漢も不審者も一目散に逃げていくんですよ」

思わず顔を上げてしまった瞬間、社長の視線が防犯ブザーから私の顔へと移る。切れ長の目が、少しか大きくなったのがわかった。

しまった。泣いてるのに気付かれた……！

「試したことがあるのか？」

あれ？ 気付かれてない？ 今驚いた表情をしたのは、防犯ブザーを実際に使ったことがあるの

に對して？

「あ、はい。週に何度かは……」

「今までの人生で何度かではなくて、週に!？」

あ、やば……っ！

動揺してたから、つい正直に言ってしまった。

女性同士だと痴漢や不審者にあつたという被害報告でも、そんな被害にあつちゃうほど自分は可愛い、異性から見て魅力的な女性なのだと自慢をしていると思われる可能性があるのだ。

まあ、実際に自慢している子がいるから、そういう風に思う人がいるわけで……どれだけ自衛しても被害にあう私からしたら『ふざけんな！』と一喝してやりたくなる。

……と、話が逸れたけれど、私は普段、痴漢や不審者に一度もあつたことがない、という設定で通している。

「そうか。可愛いと大変だな……」

容姿について言われたことに過剰反応してしまい、私は慌てて首を左右に振る。

「ち、違ふんですっ！ 可愛いとかそういうのじゃなくて、奴らは女性なら誰でもいいんですっ！」

「しかし週に何度もあうというのは、普通の女性ではありえないだろう」

友人の報告と比べて、自分が被害にあう回数は確かに尋常ではないとわかっていた。でも、否定しないわけにはいかない。否定しなければ、容姿が優れているから被害にあうのだと認めることになってしまう。

「や、いやいやいや！ ち、違うんです。本当に……あの……」

でも上手い言い訳が思いつかない。早くなにか言わなければと考えるほど、頭が真っ白になっていきまったく思いつかない。

チラリと社長の顔を見ると、みるみるうちに顔色が悪くなっていく。

「防犯ブザーを会社に忘れたせいで、不審者になにかされたのか？」

「へ？」

「だからそんなに泣き腫らした目をしているのか？」

や、やっぱり泣いてたことバレてた……！

というよりも、とんでもない誤解を生んでしまっている。

「違っ……違います！ 違うんです！」

「大丈夫だ。このことは誰にも言わない。辛いかもしれないが、泣き寝入りはよくない。俺が付き添うからすぐに警察へ……」

「いえいえいえ！ 本当に違います！ 違うんです。これはその、そう！ 眼精疲労です！ 疲れ目なだけです！ 年を取った証拠ですかねっ!? いやいや、困った、困った！」

「年って……まだ、若いだろう」

泣くはめになった原因を追及されたくなくて誤魔化したものの、苦しい……かな？

「それでその……目を押さえてたら、コンタクトがずれてしまって。あーいたたたっ」

目頭を押さえながらそれらしい言い訳を試みる。これでどうだ!?

「誤魔化さなくていい。立てるか？」

ああ、ダメだった。誤魔化せてないっ！ このままだと本当に警察まで付き添われちゃう！

「ち、違うんです。本当に違うんです。泣いてたのは、その、認めます……！ でもこれは不審者になにかされたからじゃなくて、嫌なことがあっただけですっ！ このままの顔で帰ったら両親を心配させるとして、忘れた防犯ブザーを取りにくるついでに休ませてもらってました。仕事でもないのに長々と残ってすみませんでした」

「ああ、そうだったのか。……何事もなくてよかった。いや、泣くほど嫌なことがあったのはよくないが……」

プライベートなことで事務所を使うなど怒られてもおかしくなかったのに、社長は心底ホッとしたような表情を浮かべる。

「あの、今から仕事ですか？」

「今からというか、今までずっとしていたが」

「えっ！ 今までこんな暗闇で仕事してたんですか!? 私、てっきり誰かが施錠し忘れたのかと思ってました」

「ああ、暗い方がなんとなく落ち着くからな。一人の時は電気を消して、パソコンの明かりだけで仕事をしてる」

「目、悪くしますよ？」

「もう悪いから別に構わない」

社長は閉じていたノートパソコンを開いて、キーボードに指を走らせる。

そういえば、さっき社長が近付いてきた時、煙草^{たばこ}の香りがした。席を立てていたのは、喫煙所で煙草^{たばこ}を吸っていたからだろう。だから私が入ってきた時はフロアに誰もいなくて、残業してる人はいないと思い込んだに違いない。

「あの、じゃあ私……お先に失礼します。今日は本当にすみませんでした。あ、これおつまみ昆布です。よかつたら小腹の足しにして下さい」

買い置きしておいたおつまみ昆布を社長に手渡して、そそくさと席を立つ。

「待て、まだ目の腫れは引いていない」

「え？ あ、はい」

「……後は帰宅するだけだと言っていたな。ということは、特に用事はないということか？」

なぜこんな質問をされるのだろう。まだ腫れ^はぶったくて空気に触れるだけでヒリヒリする目を瞬^{またた}かせながら、「はい」と短く返事をする。

「体調はどうだ？」

「えっと、普通ですが……」

「じゃあ、呑みに行くぞ。付き合え」

「……へ!？」

耳を疑った。社長がプライベートで社員を呑みに誘った!?

「後十五分ほどで退社できる。目を冷やして待っている」

「え？ で、でも」

「なんだ。なにか問題でもあるのか？」

色々大ありますよ！ 社長と呑みに行ったなんてこと誰かに知られたら、目黒さんに『ほら、やっぱり色仕掛けで仕事取ってるんじゃない』なんて言われかねない。

でも自分からそんなことを言えば、なにを自意識過剰になっているんだと思われてしまうだろう。き、きつい……それはきついし、恥ずかしい。

二度と会うことのない他人に思われるならまだしも、毎日顔を合わせなくてはいけない上司に思われるのは辛い！

「呑んでいる間に目の腫れ^はも引くだろう。週末だし、呑みすぎたところで明日に差し障^{さわ}ることもない」

あ……そっか。私が嫌なことがあったって言ったから、気遣ってくれてるんだ。

ささくれ立っていた心が、少し穏やかになっていく。

やっぱり社長は優しいな……

誰かに知られるのは怖いけど、社長と会社の行事以外で呑むなんて初めてだし、まさかそんな機会が来るとも思っていなかったから好奇心が芽生えてしまう。

「帰りは防犯ブザーを鳴らすはめにならないよう、タクシーで送るから心配しなくていい」

社長の気遣いに、ずっとへの字になっていた口元が綻^{ほころ}ぶ。

「はい、ありがとうございます。じゃあ、よろしく願います」